

先輩学芸員の残したもの—30万点の標本と「神奈川県植物誌」の基礎—

たなか のりひさ
田中 徳久(学芸部長)

2020年10月29日、大場達之氏が^{せいきよ}逝去されました。2019年1月13日に亡くなられた高橋秀男氏と大場氏は、ともに生命の星・地球博物館（以下、当館）の前身である県立博物館に開館前から勤められ、当館の植物標本コレクションの基礎を築き、今に続く神奈川県植物誌調査会による「神奈川県植物誌」調査を計画、主導されてきた方々です。高橋氏は、本稿の著者である田中の前任者で、県立博物館の学芸部長を長く勤め、1994年の退職後、2000年まで当館にも非常勤職員として勤められました。大場氏は、昨年退職された勝山輝男学芸員の前任者で、1998年の退職後、千葉県立中央博物館の副館長に就任されました。

当館の植物標本コレクション

当館の^{いかんそく}維管束植物標本は、33万4千件弱が収蔵資料管理システムに登録され、今も着実にその数を増やし続けています。その概要については登録件数が30万件を超えた際、本誌で報告しています（自然科学のとびら 第23巻1号2-3頁）。そこでも「名実ともに大場氏と高橋氏のお二人が基礎を作ったことが再確認されました」と書きましたが、その段階で収蔵件数をもっとも多いのが大場氏の30,015件、高橋氏は3番目の24,529件でした。



図1. フモトスミレ (KPM-NA0018624)。

大場氏の標本が県立博物館に寄贈された際の「大場コレクション」なる手書きのノートが当館に残されています。それによると、大場氏は、1949年から植物を採集し始めたようで、当初は採集者による標本番号は付しておらず、採集者番号“1”の標本は、静岡県^{あしたかいやま}の愛鷹山で1951年7月30日に採集されたフモトスミレで、当館の標本番号はKPM-NA0018624になります(図1)。標本としては、少し寂しく、分布の証拠標本としての意味はあるものの、大場氏の標本を紹介する例として適切か悩みましたが、何はともあれ“1”番の標本として紹介しました。なお、1~74番までは、スミレの仲間^{あしたかいやま}に付けられており、当時の大場氏の標本整理のシステムや興味の方向性が気になるところです。大場氏は、その後、1954年からは採集順に番号を付け始め、1954年3月5日に林業試験場で採集した標本が“11703”番となっています。残念ながら、この標本は、当館の収蔵資料管理システムには未登録のようで、いまだ未整理標本の中に埋もれているのかもしれない。

高橋氏の標本については、まとめて寄贈された記録はありません。標本原簿のようなものも見当たらず、採集者番号による管理もしていなかったようです。そこで、高橋氏が採集した標本で古いものを当館の標本収蔵資料管理システムで検索してみました。すると、1921年8月15日や1925年5月5日に採集された標本が出てきました。高橋氏は1935年生まれと聞いていますので、生まれる前に採集された標本の存在

はあり得ません。このような場合によくあるのは、和暦と西暦の混乱です。試しに1925年5月5日に採集された当該標本(KPM-NA0051992)を実際に確認したところ、ラベルには“5.May 25”とあり、年は“25”とのみ書かれていたのです。データ入力時にこの“25”年を西暦“1925”年と覚えてしまったもので、この場合、“25”年は昭和“25”年であり、正しくは“1950”年にすべきだったと考えられます。比較的よくある間違いで、皆さんも、博物館へ標本を寄贈する際や標本の整理作業をお手伝いいただく際に、ちょっと思い出していただければ、幸いです。

高橋氏と大場氏の採集した標本を紹介する予定が、思いもかけず博物館の標本のラベルやデータ入力の課題に関する話題になってしまいました。期せずしてこのような標本を見出すに至ったことは、標本管理、データベース構築における心構えを大先輩の二人に思い出させていただいたような気がします。

なお、当館に収蔵されている高橋氏と大場氏が採集した標本には、採集年代に大きく違いがあることも知られています(田中, 2017; 図2)。大場氏が採集した標本は、1950年代前半と1960年代前半に採集されたものが多く、これらは「大場コレクション」に記載のある神奈川県立博物館に寄贈されたものです。高橋氏の採集標本には、1980年代の神奈川県のもものが多く、これは後述の「神奈川県植物誌」調査が精力的に行われた時期と一致しています。

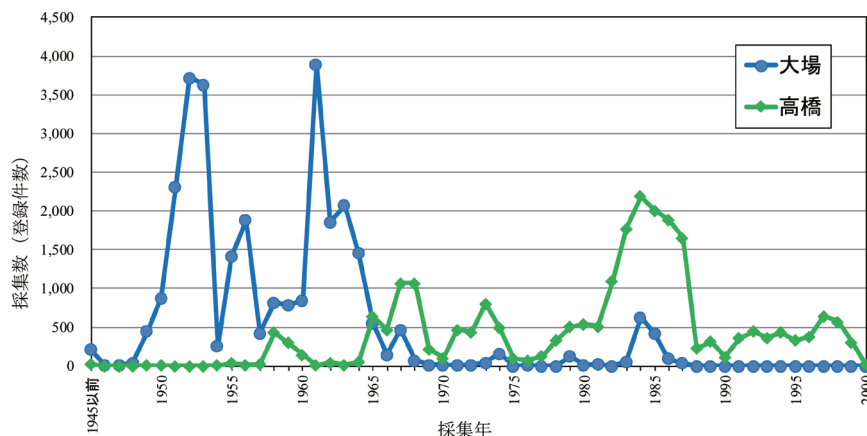


図2. 高橋氏と大場氏が採集した、当館所蔵の標本の採集数の年代別推移(高橋氏の当館退職の2000年まで)。田中(2017)に用いたデータよりグラフ化。



図3. アカイシキバナノコマノツメのタイプ標本。
(KPM-NA0023867)

「神奈川県植物誌」調査のはじまり

「神奈川県植物誌」調査は、高橋氏、大場氏の発起、企図により、神奈川県植物誌調査会が1979年に会の設立総会を開催し、始動しました。城川（1989）ほかによると、「神奈川県植物誌」調査は、日本最初の植物愛好会である横浜植物会の役員の間での1958年版『神奈川県植物誌』改訂の話題が、高橋氏、大場氏の耳に入り、「神奈川きのこの会」が県民の注目を集めていたこともあり、広く県民に協力を求めている精度の高い分布図を作成するというアイデアとともに具現化したものです。中でも、当時高価であったパーソナルコンピューターで分布図や版下を作成する方式、後の国土基本メッシュの導入は大場氏のアイデアです。この調査は、その後も継続され、その成果として『神奈川県植物誌2018』が刊行されました。また、県内標本庫に40万点弱の神奈川県産の植物標本が集積されています。そして、200名超の神奈川県植物誌調査会の会員が神奈川県の植物相を見つめ続け、その情報は地域の自然誌研究の拠点である県内各地の博物館へと提供されてきています。高橋氏と大場氏が敷いた線路は、「神奈川県植物誌」という成果だけでなく、その証拠としての標本の蓄積、調査を継続する組織と人の育成、そして博物館がそれらの収蔵、活動の拠点となる今に私たちを導いてくれました。お二人が目指した目標に向かい、今どこまで到達しているかを伺う



図4. シマコゴメウツギのタイプ標本。
(KPM-NA0077089)

ことはもう叶いませんが、後に続くものとして、二人の志に思いを致し、進み続けたいと思います。

自然誌学術界に残した業績

ここまでは、当館の植物標本や神奈川県の植物相調査に対する高橋氏、大場氏の関わりを紹介してきました。しかし、お二人の活躍とその足跡はそれだけに留まりません。

高橋氏は、県立博物館に着任される前から進めていた高山植物の研究や、島嶼の植物の分類学的な研究に多くの業績があります。当館にタイプ標本が所蔵されているものでは、^{あこうざん} 高山生の黄色い花のスマレ群の地理的変異と分布に着目、整理した際に記載したエゾタカネスミレやヤツガタケクスミレ、アカイシキバナノコマノツメ（図3）アカイシリンドウ、コケコゴメグサなどの高山植物、ミクラトンボソウやシマコゴメウツギ（図4）などを新分類群として記載しています。また、先に触れた日本最古の植物愛好会である横浜植物会の会長を長く勤め、植物知識の普及と後進の指導に力を尽くされました。

大場氏は、千葉県へ転出された後、神奈川県植物誌の経験を昇華、発展させ、2003年版の『千葉県植物誌』を製作、刊行し、『海草図鑑』（2007）のスクヤノグラフィによる図版はその集大成とも言えるものでした。また、氏の本来の専門は、植物社会学で、むしろそちらの業績

には枚挙に暇がなく、海外の学術誌はもとより、県立博物館の研究報告にも多くの論文や報文を發表しています。記載した新群集だけでも150個を超え、氏単独の記載でも100個近くがあり、研究の対象は、北はサハリンや北海道、南は奄美諸島や小笠原諸島、マリアナ諸島、上は高山帯や亜高山帯、下は海岸の波打ち際までの多岐^{たき}に及びます。特に日本の高山植生の研究ではその第一人者で、コマクサ・タカネスミレ群集やクモマミミナグサ・コバノツメクサ群集を記載した高山の荒原や超塩基性岩地の植生研究はその初期のものです。図5に大場氏が記載したコマクサ・タカネスミレ群集と同定される植分の概観を示しました。

我々学芸員の大先輩である高橋氏と大場氏の博物館に残したものを紹介しましたが、お二人が常に心に留めていた博物館の重要な機能である後世に“残す”仕事を、今後も引き継ぎ、より発展させていきたいと思っています。

本記事をまとめるにあたり当館の石田祐子学芸員に貴重なご意見をいただきました。ありがとうございます。

参考文献

- 城川四郎, 1989. 「神奈川県植物誌1988」刊行の経緯. *Flora Kanagawa*, (25): 204-209.
- 田中徳久, 2017. 神奈川県立生命の星・地球博物館の維管束植物標本の採集年と採集者. *博物館研究*, 52 (8): 24-27.



図5. コマクサ・タカネスミレ群集（乗鞍岳）。